

社報 御霊本宮

第90号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
12月1日

師走の意味

十二月のことを「しわす」といいま
すが、もともと、十二月のこの時期の
ことを「シハス」と呼称していたよう
です。「十二月には 沫雪降ると知らね
かも 梅の花咲く含めらずして」と万
葉集にあり、この頃にはすでにこの月
のことを「シハス」と呼んでいたこと
がわかります。日本書紀には「十有二
月」と書いて「シハス」と書いてあり
ます。この「シハス」の語源は今のと
ころよくわかっていません。

諸説あるのですが、少なくとも「師
走」という漢字は、近代になってつけ
られたものであるようです。実際に
「師走」という表記は元禄時代頃から
使われており、ちょうど江戸の文学が
最盛期であったときに、言葉遊び的に
的に世相を表現したものであろうと
考えられています。
現在、有力である説は、「年果つ」(一
年が果てる、要するに一年が終わる)
で「トシハツ」、または「四極」(四季
が極まる、要するに四季が果てる)で
「シハツ」、または「為果つ」(なすこ
とが果てる、要するに今年一年でやる
べきことが終わる)で「シハツ」とい
う単語が語源ではないかといわれて
いるのです。

要するに、一年の終わり、または四
季の終わり、または為すべきことの終
わり、ということ、この呼称が使わ
れていたのではないかと考えられて
いるのです。よくはわかりませんが、
たぶん、この三つのすべてが「シワス」
といわれたことの語源ではないでし
ようか。
ここで「果てる」という単語を使い、

「終わる」という漢字を使わなかったの
ですが、このことを少し考えてみましょ
う。
「果てる」というのは、「一定期間統
いていたことが終わる」ということで
す。終わりというと、そこですべてが終
わってしまうという感じで、続きがない
ということになります。果てるという
単語は、一度終わってもう一度次につ
ながるという意味があるのです。
植物が育った時の一つの終わりは「果
物」です。まさに、植物の最盛期が「花
と葉」であるとする、その一連のつな
がりの終わりが「果てた物」要するに、
「果物」になるのです。だから、一年で
植物そのものの寿命が終わってしまう
稲などに関しては、「果物」とは呼ばず、
多年草または多年樹木の実を「果物」と
呼ぶのです。
一年も、そこで終わってしまうのでは
ありません。当然に来年を良い年で迎え
なければなりません。そういう意味
を込めて次の一年につながるという意
味で、「一年が終わる」ではなく「一年
が果てる」という言い方をしていたので
す。このようになったのは、「ハテル」
という音が「ハツ」要するに「初」や「発」
という音と似ているということと無縁
ではないのではないかと考えられてい
ます。
新たな年の「初」まり、新たな年の「出
発」の前に、「ハツル」という言葉を使
うのです。これは、我々が宴会が終わる
ときに「終わり」と言わず「お開き」と
いう単語を使うことと似ているのでは
ないでしょうか。ある意味で「ハツル」
ことは、無事に一仕事終えたという意味
であり、次の期間
の始まり、新たな
門出の直前という
意味で「めでたい」
という感覚を持つ
ているのです。



お詫び

十一月十五日号は休刊しました。お詫
びいたします。

五條十八景を訪ねて

第七景 「湯川遠村」

湯川は 古より 見名存す
 相望めば 微茫 烟靄昏し
 草樹 千家 時に隠見す
 馬頭先ず 問ふ 杏花の村

湯川は昔から有名な村里である。遠く村里を望むと、かすかにけむる靄の中にうるんでいて草や木々、家々の姿が時々見え隠れしている。私は馬を駆って杏の花の咲く美しい村を訪ねる。

湯川は西吉野町湯川であると思わ



れます。

西吉野村史には、湯川の地名伝説が記されています。

「昔この土地に湯が湧き、湯川の地名がおこった。現在も小字に湯壺という所がある。(湯壺は今は赤松領だが昔は湯川領だった) ところが、馬のわらじを洗ってから湧出が止まり、その湯は有馬に飛んでしまった」

いつの頃の伝承かは分かりませんが、当時も有馬温泉が有名であったことが分かり、有馬の湯と同等の湯が湧いていたということでしょう。

湯川には、阿弥陀堂があり、本尊の阿弥陀如来像は丈六(約四・八



阿弥陀堂

五m)の木彫座像で、国の重要文化財に指定されています。胎内に墨書があり、嘉応二年(一一七〇)、仏忍仏師の作と判明しています。

新嘗祭を斎行しました

十一月二十三日、本社新嘗祭を斎行しました。当日は風が強く寒い日となりましたが、多くの役員の方の参列を得て盛大に行うことができました。

終了後、例年なら社務所で行う直会では中止しましたが、新型コロナウイルスの新規感染者数が極端に減ったこともあり、新米で醸造された白酒で乾杯しました。

御垣内にあるモミジがきれいに紅葉し、また境内社の稲荷神社鳥居前のモミジも紅く染まり、祭典を祝うかのようでした。



まさかの

全世界のオリックスバファローズファンの皆さん、優勝おめでとうござります。

いやあ、万年Bクラスのチームがやってくれました。毎年、優勝するぞと言いつつ、今年も無理やるなあという、ファンにも負け癖がついていた二十五年間だったのかもしれませんが、リーグ終盤はロッテに勢いがあり、最後は、やっぱりなあという結果に終わるのではと思っていただけに、まさかの優勝でした。

悲願の日本一はなりませんでしたが、日本シリーズは毎試合接戦で、手に汗握る好ゲームの連続でした。ただ、接戦では采配ミスや選手の失策、投手の四死球や暴投などが負けにつながります。日本一になるには、まだまだ課題があるということも痛感させられた日本シリーズでした。

Instagram @goryohongu



Twitter @goryohongu



#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。

公式ホームページ

<http://goryojinja.or.jp>

日本書紀にみる

十二代 景行天皇（七）

冬十月十三日、日本武尊を遣わして、熊襲を討たせました。このとき、年は十六歳でした。

日本武尊は、「弓の上手な者をつれて行きたいと思う。どこかに名人はいないか」と言われました。ある人が言いました。「美濃国に名人がいます。弟彦公といえます」

そこで日本武尊は、葛城の人である宮戸彦を遣わして、弟彦公を召されました。弟彦公は、ついでに石占横立、尾張の田子稻置、乳近稻置を率いてやってきました。そして日本武尊のお供をしました。

十二月、熊襲の国に到着し、地形や人の暮らしを見ました。そのとき、熊襲に魁帥という者がいて、名は取石鹿文、または川上臯帥といました。一族を残らず集めて、建物の新築祝いをしようとしていました。

日本武尊は童女（少女）のように垂らし髪にして、臯帥の宴会のときをうかがいました。剣を衣の中に隠して、臯帥の酒宴の室に入り、女たちの中に混じりました。

臯帥はその童女の容姿が良いのを賞めて、手をとって同席させていました。そして、盃をあげて飲ませ、戯れ弄んだ。夜がふけ、酒宴の人もまばらになりました。

臯帥もまた酒の酔いがまわっていました。そこで日本武尊は、衣の中の剣を取り出して臯帥の胸を刺しました。死ぬ前に臯帥は頭を下げて言いました。「しばらくお待ち下さい。申し上げます」

日本武尊は剣を留めて待たれた。

臯帥は、「あなたはどなたでいらつしやいますか」と尋ねた。大和武尊は答えて、「自分は景行天皇の子である。名は日本童男という」

臯帥は「私は国中での強力の者です。それで世の人は私の威力を恐れて従わ

ない者はありません。私は多くの武人に会いましたが、皇子のような人は始めてです。それで卑しい者の卑しい口からですが、尊号を差し上げたのですが、お許し頂けましようか」と言いました。

大和武尊は、「許そう」と言いました。そこで、「これ以後、皇子を名づけて、日本武皇子と申し上げたい」と言いました。言葉が終ると尊は臯帥の胸を刺して殺しました。

それで今に至るまで、日本武尊と褒めて言うのは、この謂れによるものです。

その後、弟彦らを遣わして、すべてその仲間を斬らせました。残る者はありませんでした。

さらに、海路を倭の方に向かわれ、吉備に行き、穴海を渡りました。そこに悪い神がいたので、これを殺しました。また難波に至る頃に、柏渡の悪い神も殺しました。

(次号につづく)

あし(アシ)

葦邊ゆく 鴨の羽がひに 霜降りて
寒き夕べは 大和し思ほゆ

志貴皇子（一一六四）

志貴皇子が文武

天皇の難波行幸に
随行したときの歌
です。「葦の生えた



水辺を行く鴨の羽
に霜が降って、こ
んな寒い夕暮れには大和のことを思い
ます。」

「羽交い」は、鳥の左右の羽が重なり合ったところをいい、背中のことです。

志貴皇子たちが訪れたこの時期にはすでに京は大和の明日香を経て藤原京に遷っていました。遠い難波の地にあつて心も身体も凍えて消えてしまいそうな不安を、京にいる人を想って拭い去ろうとしたのでしょうか。